

授業をアクティブにするための試行錯誤

蒼下和敬

一 二度目の「初任者」

私は、大学を卒業してから昨年春までの9年間、長崎県で県立学校教諭として勤務していた。長崎県では、生徒指導が厳格な大規模進進学校を二校経験した。このなかで、生徒が授業に對する動機付けを高めさせ、その上で学力保証を充実させる教科指導法を探ってきた。生徒や先生方とのよき出会いにも恵まれながら過ごしてきたが、実家の都合で、山口県を受け直すこととなった。

山口県では、再び初任者として現任校へ着任した。故郷であるため、山口県の高校は長崎県と比べると比較的リベラルな雰囲気であることは分かっていたが、現任校はその中でもさらに生徒の「自由」度が高い。また、学力試験で大学受験をめざす生徒はほとんどいない。そして、なぜか生徒は人なつっこい。前

任二校とは何もかもが真反対のように感じられ、「これはいったいどうすれば……」と戸惑いすら覚えた。

まずは、どのようにすれば授業をきちんと受けさせられるか、また、授業のたのしさをいかにして生徒に示せるか、ということを課題意識として抱かざるをえない。二度目の「初任者」としてのスタートであった。

二 まずはきちんと座って聞く

忘れられないのは着任後の一時間目である。前の時間から授業の準備をしていたが、始業のチャイムが鳴っても生徒は揃わなかった。遅れて入室してきた生徒は、反省する様子もなくスナック菓子とパックジュースを机におき(さすがに飲食はしなかったが)、「プリクラ」のびっしり貼られた下敷きを眺めながら、隣席の友人と話し始めた。

想定外のことが多く、ただただ戸惑うだけであったが、「はじめるが肝心」ということで、授業のルールを定めることにした。「時爆私内」(じばくしなない)。

これは授業で守るべき最低限のルールのキーワードである。「時」とは、時間を守ることに。特に始まりのチャイムまでには準備を終え、着席完了しておくことを示す。「爆」は爆睡しないこと。爆睡とは授業中に突っ伏して熟睡することをさす。「私」は、私語を慎む。授業中の不用意な私語を慎み、授業に集中できる環境を作ること。をさす。「内」は内職をしない。内職とは、授業中に他教科の学習をしたり読書や携帯など関係のないことをすることをさす。これらを守れない場合(自爆した場合)、当然指導の対象となるが、例えば最前列中央に着席させるなど授業内のペナルティも課すことにした。生徒はこのようなペナルティは大嫌いのようだが、決まりがはっきりしている分、しぶしぶながらルールを意識した行動を取っている。

三 双方向を意識する

生徒が決まりを守り、授業をきちんと受けるには、その授業がそれ相応の価値があると感じさせなければならぬ。また、私自身もずっと強く出続けるだけの精神力はないし、何より生徒と授業を知的に楽しみたい。そこで、50分の授業を前向きに受けられるように、次のことを試みた。授業展開順に書かせていただく。

- ① コミュニケーショントーク
号令後、すぐに授業に入るのではなく、日常生活や季節の話など、誰もが参加できる話題を投げかけ、小さなアイスブレイキングを試みた。ごく短時間しかとれないが、まずは授業者と学習者が繋がることを意識している。ただ、このままでは気が緩んでいる生徒も多い。
- ② 時事的話題(新聞記事紹介)
その日の新聞の一面(縮刷デジタル版)を表にコピーし、裏面には授業者が取り上げたい話題の記事をコピーして配付・紹介する。なお、新聞社は日替わりでローテーションさせている。生徒

自身は、「ラゲビーのことだろう」など、その日の一面に掲載されている記事を予想しながら配付を待たせたりしている。授業者が選んだ切り抜きが載る裏面は、地域・文化・スポーツなど身近に触れやすい話題を扱ったり、知っておいてほしい現在進行形の時事的話題を取り上げて解説している。これも回数を重ねることによって「読む」ようになってきた。本校では、面接や小論文のある入学試験・採用試験を受ける生徒が多く、特に高学年ほど前向きに捉えているように感じる。授業の一環として紹介しているものでもあるので、内容を理解したり考えたりしているか評価する必要がある。定期考査では、記事の内容から基礎的な事項を出題する他、授業単元の具体的事例として取り上げている。ここまでは比較的「自由」な雰囲気での授業が展開される。

③ 復習小テストの実施

ここから急に引き締めが入る。前回の授業内容の小テストとして、実際に前時で学習したプリントから5問、時事テーマから1問の合計6問を出題する。授業内容からは、「○○のことをな」と言うか」といった基礎的用語・個別名称の確認が2問、「△△とはどういうことか」といった概念の説明が1問、「どうして××は□□なのか」といった原因・背景の説明が1問の配分が出題される。なお、このテストは、隣の席同士で相互採点をさせ、6問中正解が3問以下の場合、この1時間に限りその列の最前席に座って授業を受けるルールを設定した。先ほども述べたように、本校生徒はペナルティが大嫌いである。従って、小テスト前に設定した復習タイムでは、静かに内容を見直している。また、すべての生徒とはいかないが、授業前に教室に入ってチャイムが鳴るまで復習する生徒もいる。

④ 授業で知的な挑戦を仕掛ける

1時間の授業の中で①～③で10分程度使っている。残り時間40分程度でいわゆる本題を扱うことになる。授業は、次の3点を特に注意している。

I・授業内容は身近な話題や具体的事例を単元テーマにする
別の考察(11年)で、生徒は教材の内容が身近な場合や具体的な場合、学習意欲が高いことを確認した。実生活・実社会において自らとの関係性が見いだしやすいもの、または、自らとの関係は遠く感じられても、具体的にイメージでき考察できる事例を授業の中心素材として扱い、その原因や背景を考察するような授業展開を考えている。

II・「なぜ」発問で思考を促す
学生時代に大学の先生が、「生徒が学びを楽しいと感じるときは、『持っている知識を活かして説明できる』とき」と「新しい知識に更新されるとき」である。」と話されていた。どうすれば授業の中でこうした機会を生徒に提供できるのか。森分孝治(78年)は、具体的な社会的対象に対して教師が「なぜ」と発問し、その疑問を十分に説明できる知識(概念や技能を含む)を生徒が獲得していく過程を授業に取り入れることを主張している。私も単元ごとに「なぜ○か」という主発問を設定し、生徒の「仮説」をもとにして、発問と応答を繰り返す中で、基本的事項の整理や概念の獲得をめざす授業構成を基本とした。

例えば、水産業の単元では、日本近海で巨大なクラゲが発生し続けているという映像を見せた後で、授業テーマ(主発問)として「なぜエチゼンクラゲは最近大発生し続けているのか」と問い、生徒に仮説を考えさせる。生徒は地球温暖化や海が汚れて、プランクトンが増えたことなどを出すことが多い。そこで、まず小発問として「クラゲが生きていく条件は何か」を問い、発問と応答を繰り返す中で、栄養源となるプランクトンの存在、そしてプランクトンが発生する条件を確認していく。生徒は中学校や高校の地理のこれまでの学習で「大陸棚」「湧昇流」などの概念は得ており、ある程度の説明はできる。生徒は「日本の周りはプランクトンが発生しやすい条件が整っているから」と答える。これは「知っている知識を整理し活かして説明できる」段階だが、続いて「それでは大発生はなぜ『この数年』なのか」と問う。生徒からは「やっぱり温暖化?」など断片的な回答はあるが、きちんと説明はできない。そこで、水産業の統計に注目し、まず遠洋漁業の成長と衰退

に触れ、その変化の背景を、この時期の国際情勢や漁業の動向を確認しながら発問と応答によって整理する。続いて遠洋漁業に代わって成長した沖合漁業についても考察する。「なぜ沖合漁業は80年代後半から急減？」と問うと、「魚がいなくなつた？」などと「回答があり、再び「なぜ？」」「繰り返すなかで、国別水揚高の推移を提示する。このなかで80年代後半から近隣国の水揚げが急増し、乱獲が進んだ結果プランクトンを食べる魚介類が急減したことに気づかせる。終部では主発問に対する自分の説明を論述させる。このように、単元の後半では新しい知識(概念)を獲得(更新)することを期待している。

Ⅲ・ICTで具体的思考を支援
先の内容をチョーク&トークでこなす自信はない。まずエチゼンクラゲの大きさと多さを生徒が驚かなければこの単元は成立しない。また、湧昇流や潮目の概念、グラフの読み取りは、図への指さしやアニメーションなどの具体的な強調がなければ、把握しづら
い。誰でも自然な形で具体的な

理解ができるよう、インパクトがほしい場面や説明の要所では図やグラフ、動画などを画面に映し出し、プリントにも同じ資料を載せて、一緒に線を引いたり作業をするようにしている。

四 思い切つて活動させる

いつも座学ばかりでは、どうしても限界はある。一学期に一回程度、班を組ませ自分たちのプレゼンテーションをさせている。例えば、気候の領域は、気候要素やケツペンの気候区分を授業で確認した後、進学校にいたときはそのまま熱帯から寒帯まで座学形式の授業をしていたが、本校では、それを気候帯別に発表班を分け、調べさせ、発表させ、相互評価させた。生徒には、副教材が配付されており、例えば熱帯であれば、必ず副教材の「ラトソル」「スコール」「サバナ」など熱帯気候の特徴を踏まえてプレゼンすること、必ず1つは「なぜ○○か」という見出しを付けることなどを条件付けて、事例地域設定やプラスチックの工夫は自由にさせ、模造紙1枚以上にまとめるように

指示した。模造紙は、後の授業プリントの1つとしてスキャンされて各生徒に配付される。その中から最大3問程度が定期考査の出題に反映される。また、発表の工夫・わかりやすさなどを観点別に相互評価し、評価内容は平常点の一部に加味するとした。気候帯の単元では、生徒からの提案で、自分が担当した気候の食材や文化を踏まえた料理を作ることになり、家庭科と連携して実習をすることになった。実際の実習では、生徒たちは、計画・買い出しから準備し、校長を含む多くの先生方も招待して、熱心に授業の経緯や料理の説明をしていた。こうしたプレゼンや実習の場面では、座学とは違った生徒の積極性を見いだすことができ、授業者にとつても新たな評価の側面を得られた。

五 おわりに

現任校では地理を使って受験する生徒はほとんどいない。しかし、生徒の授業に対する期待と評価のハードルは、以前勤務していた進学校よりもかなり高い。本校では、外発的な動機

付けには限界がある。しかし、「きょうは何をするのか」「この事例はどうしてこんなことになってるのか」という興味や疑問を抱いてもらえれば、時として進学校よりもかなり深い内容の学習もできることを感じながら、それでも冷や汗と試行錯誤の日々を過ごしている。今年、十年経験者研修を受けているが、相変わらず、毎日が初任研のような日々である。



授業(グループ発表)の様子

(文献)
蒼下和敬「生徒の評価からみた高校地理授業の改善(1)」長崎大学教育学部紀要、2011年
森分孝治「社会科授業構成の理論と方法」明治図書、1978年
(山口県立響高等学校)